

門信徒会運動研修協議会  
第 部  
浄土真宗のみ教えに聞く  
Ver.14

平成21年10月6日(火)  
正覚寺愚住 堅田 玄宥

# 目次

- [1. 開かれたお寺をめざして](#)
- [2. 浄土真宗の教章\( \) 親鸞聖人のみ教えとは何か \( \)](#)
- [3. 成就文釈\(全\)、ご讃題\( \)](#)
- [4. 浄土真宗は聞の宗教、ご讃題の構成\( \)  
こゑについて決定往生のおもひをなすべし\( \)](#)
- [5. 名号の謂れを聞く](#)
- [6. 六字釈](#)
- [7. 成就文と銘文から導かれる称名の意義、](#)
- [8. 本願招喚の勅命](#)
- [9. 称即名、見遇から聞遇へ、](#)
- [10. 行信不離・行信不二、声は如来の顕現である\( \)、](#)
- [11. ご讃題のご文の意義](#)
- [12. 信心獲得プロセス](#)
- [13. 聞名で足り、称名は不要と言えるか](#)
- [14. 聞名実現の機会毎の対比](#)
- [15. 信心正因 称名報恩](#)
- [16. 蓮如上人辞世のお歌](#)

# 開かれたお寺を目指して

## 1. 基幹運動

1962年 700回大遠忌法要の翌年「[門信徒会運動](#)」提唱

1985年 「[同朋運動](#)」と一本化され「[基幹運動](#)」発足

## 2. その趣旨

ア) 門信徒と僧侶一人一人が、[念仏者](#)として、

イ) 『浄土真宗の教章(私の歩む道)』のお心を体し、み教えを依処に

「[開かれたお寺](#)( )」を通して、

ウ) み教えを語り・伝え ([全員聞法](#)・[全員伝道](#))、

エ) [人々の苦悩](#)や[社会の課題](#)に応えていこうとする運動である。

註) 「[開かれたお寺](#)」というのは、僧侶・門信徒だけのお寺ではなく現代社会の役割を担うお寺だという意味である。

「人々」には、未来の子や孫も含まれる。

[目次へ](#)

# 浄土真宗の教章(私の歩む道)

Ref)平成20年4月15日制定『新教章』より

【教義】阿弥陀如来の本願力によって信心をめぐまれ、念仏を申す人生を歩み、この世の縁が尽きるとき浄土に生まれて仏となり、迷いの世に還って人々を教化する。

【生活】親鸞聖人の教えにみちびかれて、阿弥陀如来のみ心を聞き、念仏を称えつつ、つねにわが身をふりかえり、慚愧(ざんぎ)と歡喜(かんぎ)のうちに 現世祈禱などにたよることなく、御恩報謝の生活を送る。

【宗門】この宗門は、親鸞聖人の教えを仰ぎ、念仏を申す人々の集う同朋教団であり、人々に阿弥陀如来の智慧と慈悲を伝える教団である。

それによって、自他共に心豊かに生きることのできる社会の実現に貢献する。

[目次へ、参照\)旧教章](#)

# 親鸞聖人のみ教えに帰ろう

覚如・蓮如上人の法相は親鸞聖人のみ教えそのものではありません。

ア)これまでご常教では、「信心正因 称名報恩」が通説でした。

イ)しかし「信心正因」「称名報恩」各々は親鸞聖人のみ教えであっても、

「信心正因 称名報恩(信因称報)」は、覚如・蓮如上人の法相であって、親鸞聖人の法相ではありません。 ご常教の今日的課題

信因称報は、信心が先で称名を後(信前行後)とするのに対して、聖人のみ教えは、行信不離・行信不二の「念仏往生」のみ教えだからです。

説明図(親鸞聖人のみ教えとご常教参照)

新教章は「親鸞聖人のみ教えに帰ろう」と謳われていると窥えます。

新たな教章の【生活】と【宗門】で「親鸞聖人のみ教えに導かれて」と二度までも謳われています。

【教義】の「信心」が【生活】では敢えて信心の元となる「聞」で置き換えられ【宗門】では消えていることからそのことが窥われます。 目次へ

# 研修目標

そこで本日は、第 部で

「聞くことが信心を表わす(聞即信)」

「浄土真宗は聞の宗教だ」

というお心を親鸞聖人のご文によって頂戴  
してみたいと思うのであります。

[目次へ](#)

# 成就文釈(全)

- ・『無量寿経』(下)のなかに、あるいは「諸有衆生 聞其名号 信心歡喜 乃至一念 至心回向 願生 彼国 即得往生 住不退転」と説きたまへり。
- ・「諸有衆生」といふは、十方のよろづの衆生と申すところなり。
- ・「聞其名号」といふは、本願の名号をきくとのたまへるなり。  
きくといふは、本願をききて疑ふところなきを「聞」といふなり。  
また、きくといふは、信心をあらわす御のりなり。
- ・「信心歡喜乃至一念」といふは、「信心」は、如来の御ちかひをききて疑ふところのなきなり。
- ・「歡喜」といふは、「歡」は身をよろこばしむるなり、「喜」はころによろこばしむるなり、うべきことをえてんずと、かねてさきよりよろこぶところなり。
- ・「乃至」は、おほきをもすくなきをも、ひさしきをもちかきをも、さきをものちをも、みなかねおさむることばなり。
- ・「一念」といふは、信心をうるときのきはまりをあらはすことばなり。
- ・「至心回向」といふは、「至心」は眞実といふことばなり、眞実は阿弥陀如来の御ころなり。  
「回向」は、本願の名号をもって十方の衆生にあたへたまふ御のりなり。
- ・「願生彼国」といふは、「願生」は、よろづの衆生、本願の報土へ生まれんとねがへとなり。  
「彼国」はかのくにといふ、安樂国ををしへたまへるなり。
- ・「即得往生」といふは、「即」はすなはちといふ、ときをへず、日をもへだてぬなり。また「即」はつくといふ、その位に定まりつくといふことばなり。
- ・「得」はうべきことをえたりといふ、眞実信心をうれば、すなはち無碍光仏の御ころのうちに攝取して捨てたまはざるなり。摂はをさめたまふ、取はむかへると申すなり。をさめとりたまふとき、すなはち、とき・日をもへだてず、正定聚の位につき定まるを「往生を得」とはのたまへるなり。

Ref 『一念多念文意』「成就文の釈」全書P2-604-5、註P677～)

[目次へ](#)

# ご讚題

「聞其名号」といふは、本願の名号をきくとのたまへるなり。

きくといふは、本願をききて疑ふころなきを「聞」といふなり。

また、きくといふは、信心をあらわす御のりなり。

(Ref 『一念多念文意』「成就文の釈」全書P2-604-5、註P678)

然るに『経』に「聞」といふは、衆生、仏願の生起本末を聞き

て疑心あることなし、これを「聞」といふなり。

(Ref) 「信文類(末)」(註釈版P251)

[目次へ](#)



# 浄土真宗は聞の宗教

- 1) 何を聞くのか？
- 2) どのように聞くのか？
- 3) 聞くことがそのまま信心である。

[目次へ](#)

# ご讃題の構成 [目次へ](#)

	御 文	特 徴
第1文	「聞其名号」といふは、本願の名号をきくとのたまへるなり。	聞の対象を示す。 …(後述)…
第2文	きくといふは、本願をききて疑ふ ころなきを「聞」といふなり。	聞の対象を示す 信を以て聞を表わす (聞の第一釈)
第3文	また、きくといふは、信心をあらわす御のりなり。	聞を以て信を表わす (聞の第二釈) …(後述)…

# 浄土真宗は聞の宗教

## 1) 何を聞くのか

本願の名号を聞く(第一文)。本願をきく(第二文)。

然るに『経』に「聞」といふは、衆生、仏願の生起本末を聞きて疑心あることなし、これを「聞」といふなり。(Ref)「信文類(末)」(註釈版P251)

**仏願の生起(二種深信の「機の深信」)**

自分の本当の姿(貪欲・瞋恚の煩惱成就の私の姿)をお聞かせに与る。

そうすると、自力がスタル

**仏願の本末(二種深信の「法の深信」)**

愚かな私を救い取ろうとご本願が建てられ、完成し、名号となってただ今も働いて居て下さることをお聞かせに与る。

**名号のいわれ Ref)六字釈(後述)**

**名号そのもの 本願招喚の勅命を聞く(よび覚まされる)。**

**(問)お聴聞ではお名号のお謂れをお聞かせに与れば十分か?**

**(お謂れをお聞かせに与れば直ちに勅命を聞いたことになるのか?)**

[目次へ](#)

# 浄土真宗は聞の宗教

(問) お聴聞ではお名号のお謂れをお聞かせに与れば十分か?

(考察) 成就文では、釈尊がお名号のお謂れを明らかにして下さっている。これは、二河白道の釈迦の「発遣」に当たり、阿弥陀如来の「招喚」そのものではない。釈迦の発遣に促され、弥陀の招喚の勅命に目覚めるのでなくてはならない。

そうすると



**名号そのものを聞くのでなくてはならない。**

阿弥陀如来の「本願招喚の勅命」を聞くのでなくてはならない。

阿弥陀如来は、本願招喚の勅命となって届いて下さるからである。

お念仏は、阿弥陀様のお喚び声である。お喚び声そのものを聞くのである。

(ご法話)

(その1) 私が直結するのは如来の声である。 二河白道

Ref) H21年10月第1号\_お名号を聞くとは\_Ver1\_りびんぐらいぶず\_090916

(その2) こゑについて決定往生のおもひをなすべし(法然聖人)。 目次へ

# 浄土真宗は聞の宗教 こゑについて決定往生のおもひをなすべし

**法然聖人は次のように仰せであります。**

「たゞ心の善悪をもかへりみず、罪の軽重をもわきまえず、  
心に往生せんとおもひて、 **信心を指す。**

口に南無阿弥陀仏となえば、 **十念を指す。**

こゑについて決定往生のおもひをなすべし。

その決定によりて、すなはち往生の業はさだまる也」と

(Ref『往生大要抄』真宗全4.580)。

**これは、親鸞聖人の六字釈の原形となった御文であります**

**(平成21年9月15日行信教校 梯 實圓和上講義)。**

[目次へ](#)

# 浄土真宗は聞の宗教

## 2) どのように聞くのか

きくといふは本願をききて疑ふころなきを聞といふなり

(聞の第一釈)

疑いなく聞く(無有疑心で聞く)。

わがはからいを入れずに聞く(如来様の仰せの通りに聞く)

「無有疑心」が信心(信楽)であるから、

聞の第一釈は、信を以て聞をあらわすといわれる。

[目次へ](#)

# 浄土真宗は聞の宗教

## 3) 聞くことがそのまま信心である

浄土真宗の  
信の特徴

きくといふは、信心をあらわす御のりなり

(聞の第二釈)

(問) 聞くことがそのまま信心である信心とはどのような信心か

(090612問者梯和上の問) [目次へ](#)

# 浄土真宗は聞の宗教

(問) 聞くことがそのまま信心である信心とはどのような信心か

(注意) これに応えるには、日本語の特徴に注意して読むことが大事である。

目的語(聞の対象)や副詞(疑いなく)を補って読む。

名号(本願)を疑いなく聞くことがそのまま信心である。

具体的には「本願招喚の勅命」となって届いて下さるその勅命を聞き受け、喚び覚まされるのである。

[目次へ](#)



# 浄土真宗は聞の宗教

名号(本願)を疑いなく聞くことがそのまま信心である。

「本願招喚の勅命」を聞き受け、喚び覚まされるのである。

## 「勅命の他に領解なし」

勅命を聞き受けさせたいとの親心ならばこそ、如来様は「きくといふは

信心をあらはす御のりなり」と仰せになったのに相違ないことであります。

[目次へ](#)

# 名号の謂れを聞く

名号の謂れは、六字釈に明らかにされている。

- 六字の三義
- 1) 帰命、
  - 2) 発願回向、
  - 3) 行

## 1) 「帰命」釈

・阿弥陀如来が衆生をお救い下さるお姿(能回向の相)を表わす。

お名号を回向して下さるときの如来様のお姿をいう。

(問) そのときの衆生はどのような姿であることを如来様は願っておられるか

・衆生は、如来様の仰せに従うことを意味する。Ref)和讃のご左訓。

[目次へ](#)

# 名号の謂れを聞く(続1)

## 2)「発願回向」釈

- ・如来が衆生を救おうと願っておられるお心(能回向の願心)を表わす。

お名号を回向して下さるときの如来様のお心をいう。

(問) そのときの衆生はどのような心であることを如来様は願っておられるか

- ・衆生が仰せの通りに浄土に往生したいと願うことを意味する。

[目次へ](#)

# 名号の謂れを聞く(続2)

## 3)「即是其行」釈

- ・「阿弥陀仏」は如来がお与え下さる往生の行(所回向の行)である。

それ故、



- ・衆生が称えれば衆生の行として成立し、如来様の大行となって働いて下さる。称えさせて迎え取ろうという如来様の行だからである。

(問) 衆生はどうすればよいと  如来様は願っておられるか

如来様が仕上げて衆生の行として回施して下さっているのだから、衆生は仰せの通りにお念仏を称すればよいのである。

この「仰せの通りに」が信心(信楽 = 疑いがない)を意味する。

[目次へ](#)

# 六字釈(行文類&銘文)

	法体釈	約機釈( )
歸命	能回向の相(本願招喚の勅命)	仰せに従う姿(Ref:ご和讃の歸命のご左訓)____ 如来の勅命にしたがふところ(Ref銘文P651) 釈迦・弥陀の二尊の勅命にしたがひて召しにかなふと申すことば(Ref銘文P655)
発願回向	能回向の願心	南無阿弥陀仏をとらふるは、すなはち安樂浄土に往生せんとおもふになるなり(Ref銘文P655) 二尊の召しにしたがふて安樂浄土に生まれんとねがふところなり(Ref銘文P656)
即是其行	所回向の行(大行)	安養浄土の正定の業因なりと <b>のたまへる</b> ところなり(Ref銘文P656)。 大行とはすなはち無碍光如来の名を称するなり(大行釈) _____

「仰せ(勅命)に従う」というのが信心そのものである。

[目次へ](#)

# 成就文と銘文から導かれる称名の意義

聞其名号とは、諸仏如来の名号讃嘆の声を聞くことである

しかし、いきなり愚かな凡夫に聞けるわけがない。

(本願成就文)。

愚かな凡夫がお名号をお聞かせに与るお手立てが十七願成就文のお心である。

釈尊は、諸仏如来のお一人(人間世界の如来様)である。

釈尊に始まり篤信の肉親に繋がる名号讃嘆の系譜が私を導いて下さった。

南無阿弥陀仏をとなふるは仏をほめたてまつるになるとなり

(銘文、註p655)。

自ら称えることが諸仏如来の名号讃嘆になる。

成就文と銘文のお導きにより



「称えれば、聞こえて下さる名号讃嘆の声に聞き入る」

ことが可能になるロジックが成立する。

[目次へ](#)

# 本願招喚の勅命

Ref)行巻「六字釈」(註釈版P170)(続)

歸命は、**本願招喚の勅命**なり。

「喚」とは、如来様がよばふ(喚び続けていて下さる)お姿である。

「称名」は称えつつ、一声毎に如来のお喚び声に喚び覺まされる姿である。

銘文と六字釈のお導きにより



**「称即名」**

「私が称えることが即お名号が働いていて下さるお姿である」

ことになる

[目次へ](#)

# 「称即名」先達のお味わい [目次へ](#)

## 先達のお味わい

例 われ称え われきくなれど なむあみだ

つれてゆくその 親の呼び声(原口針水和上)

例 みほとけを 呼ぶわが声は みほとけの

われを喚びます みこゑなりけり(甲斐和里子女史)

例 声しあらば あやうからじな 火に水の

なかのほそみち 見ゆも見えずも(一蓮院 秀存師)

[目次へ](#)



# 「称即名」先達のお味わい

罔極仏恩報謝情 (罔極(もうごく)の仏恩報謝の情)

清晨幽夜但称名 (清晨(しょうしん)幽夜(ゆうや)ただ名を称う)

堪歡吾称雖吾聽 (歡ぶに堪えたり吾称え吾聽くと雖も)

此是大悲招喚声 (これはこれ大悲招喚の声なり)

(長門国 江崎 教専寺第十代住職「大巖(だいごん)(1791~1865)」)

極まりなき仏恩に報謝する思いで朝な夕な、ただみ仏のみ名を称えています。まことに悦ばしいことには、私が称え、私がお聞かせに与る南無阿弥陀仏は、「さあお浄土へ連れて行くぞ、心配せずに私にまかせよ」と招き喚び続けていて下さる如来大悲招喚のお喚び声でありました (Ref梯 實圓和尚 自照社出版「如来のよび声に気づく」2)P53)。

[目次へ](#)

# 見遇から聞遇へ

- 曇鸞大師は、仏説無量寿経の第二十二願文のお心を開いて「阿弥陀仏に遇う」ことの二義について明らかにして下さったお方である（Ref 『浄土論註』）

## 「見遇（けんぐう）」

まのあたりに遇う仕方でありお浄土で賜る利益である

## 「聞遇（もんぐう）」

仏の名を聞くという仕方であり此土（迷界である娑婆世界）で恵まれ実現可能な利益である。

- これは親鸞聖人の現生正定聚のご法義が誕生する根拠になった御文である

（Ref 梯 實圓和尚 行信教校平成21年2月3日ご講義）

# 称即名の構造

	法体積	約機積
南無阿 弥陀仏	タスクル	タスカル
お正信偈	唯説弥陀本願海	唯聴弥陀本願海 (靈山勝海和上)

ひだりもじ きけばみぎもじ たすくるの  
ほかにたすかる 信なかりけり  
(利井 鮮明和上)

[目次へ](#)

# 行信不離・行信不二

「行信不離」とは、お念仏と信心とは離れて存在するものではない。

「行信不二」とは、お念仏と信心とはそのものからは名号だからである。

となふるは おのがこころを 打ちおきて  
ちかひにすがる すがたなりけり

(足利義山師) Ref) 瓜生津隆真先生「正信偈のこころ」p48)。

「となふる」 お念仏申すこと

「おのがこころを打ちおきて」 仰せの通りに(わがはからいをいれず)

「誓ひにすがる」 如来様の御本願(誓願)におすがりすることをいう。

2節目以降が信心を表わす。

「念仏往生」と信じている姿が称名である(H21/9/15梯和上講義)

# 声は如来の顕現である

声は如来の顕現である(曇鸞大師)(RefH21年9月8日 梯 實圓和上講義から)

「声」とは名なり。・名物を悟らしむる。・名をもって、よく物を悟らしむ。」(Ref『論註』莊嚴妙声功德成就、註釈版P69)

弥陀は名をもって物を接したまふ (Ref後善導『弥陀経義』註釈版P180)

(RefH21年9月9日 瓜生津隆真先生ゼミ質疑応答から)

(Ref)H21年9月8日 行信教校 梯 實圓和上講義から)

- ・ お念仏の一声一声が絶対の尊嚴である。
- ・ 一声一声に如来様の顕現をみていくのが本願の念仏である。
- ・ 阿弥陀仏の声を聞いたとき、私は阿弥陀仏に包まれていることがわかるようになる。

Ref) 眞実信心をうれば、すなはち無碍光仏の御こころのうちに攝取して捨てたまはざるなり(一念多念証文)。

- ・ 言葉に生きるよりない人間だからこそ、如来は言葉となって現われて下さる。
- ・ われわれにとって直結しているのは如来の言葉である。

かくお聞かせに与って

「さようか」と頭が垂れるか否かが分かれ目である。

[目次](#)△

# ご讚題のご文の意義

本願成就文のお心を説き明かされた一多証文のご文  
について

本願の名号をきくとのたまへるなり。

きくといふは、信心をあらわす御のりなり。

(考察)

ア)下線部は、如来様の仰せに宗祖ご自身が頭を垂れて聞き入っていらっしゃるお姿であること。

更に言えば、

イ)如来様がただ今働いていて下さる何よりもの証拠  
であること。

が知られるのであります。

[目次へ](#)

# 唯然 - やや、しかなり - そうです

- 「ご讚題の御文は、親鸞聖人ご自身が如来様の直説に頭を垂れ聞き入っていらっしゃるお姿だと頂戴できるのですが」と、お尋ねしますと、  
梯和上は、にこやかにただひとつ「**そうです**」とおっしゃったのであります。

(後書き)

大経には阿南尊者が釈尊の尊いお姿を拝見して自問自答する一節が示されています。

和上から頂戴した「**そうです**」を反芻しながら、そのお心を訪ねてみたことありました。

- 「**唯(ゆる)然(ねん) - やや、しかなり - そうです**」は、法の示すままであって、他に何らの要素が全く加わらない状態、如実(によじつ)のありさまを指すことが知られます。
- 換言すれば、真実の世界、浄土がこの娑婆世界を包んで言葉を超えた言葉で自らを顕わしているその姿に見入っている言葉だといわざるをえません。
- まことに「**そうです**」は、阿弥陀如来が釈尊と一体となってお姿を現し給うたのを見てとった阿南尊者自らの確認の言葉でありました。

[目次へ](#)

# 信心獲得プロセスー勅命の他に領解なし

- まず、南無阿弥陀仏とお念仏申しましょうしょうみょうねんぶつ (称名念仏)。
- すると聞こえて下さるものがありますもんみょう (聞名)。
- それは、阿弥陀如来様直々のお喚び声でありますほんがんしょうかんのちよくめい (本願招喚の勅命)。
- お喚び声によび覚まされて、思わず私の心の扉を開くというとうとう(信楽 = 疑蓋間雑あることなし)。
- その途端、私の胸に如来様の息吹が飛び込んで下さいます。
- 如来様のまことのお心が宿って下さるようになったのですしんじんぎやくとく (信心獲得)。
- その日から、宿って下さった如来様の命によってお育てに与るのです。
- それ故、浄土真宗の信心は、勅命の他に領解なしと申すのであります。

ちよくめいのほかにりょうげなし

[目次へ](#)



# 信心獲得プロセスー勅命の他に領解なしー解説

- 浄土真宗のみ教えを未信の方々にお伝えするにはどうすればよいのか。
- 伝統教学の「信心正因 称名報恩」では、限界があることは見えています。これでは、信心獲得の道行が明らかでないからであります。
- また、信心を先とし、称名は信後の報恩感謝のみと捉えるあり方は教行信証に説き著された親鸞聖人のみ教えと大きく異なります。
- 念仏は、第十八願文に謳われたとおり、浄土往生の行体であり、信心獲得のプロセスの要素であることは明らかであります。
- Ref)「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀に助けられ参らすべしとよきひとの仰せをかぶりて信ずる他に仔細なきなり」が信心の論理だからであります。
- 第十七・十八成就文には、諸仏如来の名号讚歎のその名号を聞くという仕方「聞其聞名」が謳われてあります。
- それ故、称名念仏し、聞こえて下さる御喚び声に呼び覚まされるというのが信心獲得のプロセスになるのであります。
- 大事なことは、他力の念仏の行の主体は阿弥陀如来であり、衆生はその行を本願力回向によって頂戴するのだと押さえることでもあります。

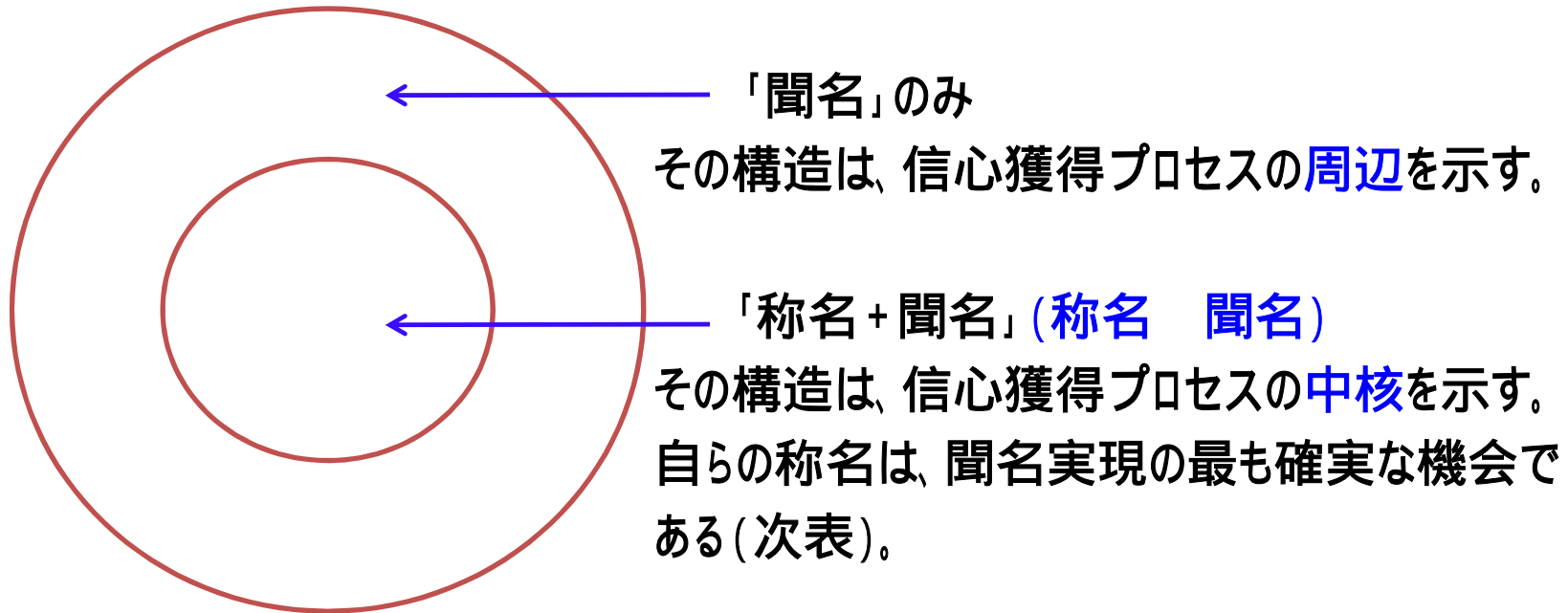
[目次へ](#)

# 聞名で足り、称名は不要と言えるか

Ref) 十八願成就文には、「聞其名号」とあるのみ(Ref「十八願成就文」)

Ref) 「下至十声」の「下至」といふは十声にあまれるものも聞名のものをも往生にもらさずきはぬことをあらはししめすとなり(Ref『銘文』『観念法門』の釈P657)。

(答) 信心獲得という同じ効果を招来できたとしても、称名ぬきの聞名は、構造上は「称名+聞名」で構成する「信心獲得プロセス」の**不完全実施**であると見られる。



[目次へ](#)

# 聞名実現の機会毎の対比

聞名	聞名	
(観念論上の聞名)	(現実の聞名)	
称名がない場合	他人の称名	自らの称名
	ひとりぼっちとか、異教徒の中では、称名念仏の声を聞くことができない	自らの生活実践上、最も確実に聞名できる機会である。

「自らの称名 聞名」は、いつでも、どこでも、どんな状態でも現実に「聞名」できる唯一つの機会である。

一方、「称名のない聞名」は、観念論上の聞名（頭で理解しただけの聞名）に留まり、生活実践に繋がらない。[目次へ](#)

# 「信心正因 称名報恩」再考

- 1) 覚如・蓮如上人の教学で宗祖の御文を限定的にみてはいけない。  
信前行後は、覚如・蓮如上人の教学であり、宗祖の教学は、念仏と信心の行信論の上に立つ念仏往生の教学である。
- 2) 信心正因は、称名報恩と対比するようなチッポケなものではない。  
・「信心正因」は、「菩提心正因」の趣旨であり、摧邪輪を論駁して浄土の菩提心を明らかにしようとされたものである。

(Ref) 平成21年9月15日行信教校 梯 實圓和上講義)。

- 3) 「信心正因 称名報恩」を根拠に、称名は信心獲得後の報恩感謝の念仏に限るとしてはいけない。  
称名報恩は、信心獲得後の称名は報恩感謝の思いを伴うことを言う。  
・しかし、念仏は法であり、時を選ばず働いていて下さる。

したがって、



- ・信心獲得以前の念仏がすべて自力の念仏だとして、これを捨て去ることを求めてはいけない。 [目次へ](#)

# 親鸞聖人のみ教えとご常教

## 親鸞聖人のみ教え

信前行後のご常教「信心正因 称名報恩」は、覚如上人・蓮如上人によって確立された法相であって、信心獲得以後の念仏生活という平面上でのみ教えの一つの姿にすぎない。

- 親鸞聖人のみ教えは、「行信不離・行信不二」の「行信論」の上に立つ「念仏往生」の法相であって六字釈・二種深信に示される如く立体的・構造的・躍動的である。
- 参)二河白道

[目次へ](#)

# 蓮如上人辞世のお歌

弥陀の名を

聞きうることのあるならば

南無阿弥陀仏と

たのめみなひと

辞世のお歌は思いがけなくも「信前行後」の法相ではなく「称えれば聞こえて下さる御呼び声にお任せなさいませよ」との「称即名」のお心と窺うことであります。

[目次へ](#)

# 親鸞聖人のお言葉

弥陀の本願と申すは、名号をとなへんものをば極楽へ迎へんと誓はせたまひたるを、深く信じてとなふるがめでたきことにて候ふなり。

信心ありとも、名号をとなへざらんは詮なく候ふ。

また一向名号をとなふとも、信心あさくは往生しがたく候ふ。されば、念仏往生とふかく信じて、しかも名号をとなへんずるは、疑ひなき報土の往生にてあるべく候ふなり。

...

さだめてさきだちて往生し候はんずれば、浄土にてかならずかならずまぢまゐらせ候べし。あなかしこ、あなかしこ。

(Ref)「親鸞聖人御消息」註釈版聖典p785)